

中国が香港になる日

本書のタイトルは、いささか挑発的であるけれど、それは決して誇張ではなく、あと四年九カ月に迫った香港の中国への返還の日までに、中国は、香港によって、刻一刻と変貌をよぎなくされるであろう。

その意味でも「中国が香港になる日」が近づいているのである。

本書は、毎月、中国の基本文献を丹念に読みつづけている著者が、豊富な資料や情報をべしスにして一気に書き下ろした中国の改革・開放政策とその対外的諸関係を論じた現状分析であるが、随所にポスト鄧小平時代への展望が織り込まれていて、興味深い。

今日の中国が抱える矛盾―浴

小島朋之著



岸部と内陸部の経済格差の増大や中央と地方との分離傾向などは、やがて来るべき中華人民共和国の再編への道程であるとも見なしている著者は、「共産党独裁の社会主義を覆す民主革命」の可能性も大きいと展望している。

そのためには三つの条件が必要で、①民主化運動が天安門事件以上に全国的規模に拡大して

党や軍の改革派が守旧派に勝ち、②農村・農民が運動を支持し、③国際的圧力が民主化弾圧を阻止することだとしている。

このような状況の中国に直面したとき、外部世界は「中華連邦への陣痛として『内戦』さえも見守る姿勢が必要かもしれない」と言う。

著者が本書で述べているチベット民族の独立への要求や大量の難民流出の可能性、人口爆発の圧力などを考えると、中

国の将来はまだまだ予断を許さず、「中華牌」(中華ブランド)の中国独自の発展戦略にも多くの障壁があると見なければなるまい。

このように本書は、今日の中国が抱える重要問題を鋭い分析によって平易に解き明かしており、日中国交二十周年に当たる今日、多くの読者、とくにビジネス界の読者には是非一読をお勧めしたい。

「内戦」をも予想した鋭い分析

性、人口爆発の圧力

(時事通信社・一〇三〇円)

東京外大教授 中嶋嶺雄